

＜基となる事例＞

「収穫祭をしよう」

【活用事例】 「樽でできたよ！さつまいも」
～畑のない住宅街エリアでの実践～

事例活用の理由

- 園庭でも畑と同じように収穫したり、収穫を喜び合ったりする体験ができればと考える中で、収穫する際のねらいについて、再確認するための資料とした。
- 『収穫祭をしよう』において、子供たち同士が共通のイメージをもち、同じ目的に向かって活動する楽しさや達成感を味わうという本園におけるねらいを今回の活動に取り入れたいと考え本事例を活用した。



保育者の願い（ねらい）

- 園内で栽培できる環境を整え、身近に栽培物の成長を見たり、気付いたりできるようにし、収穫への期待がもてるようにする。
- みんなで収穫することの楽しさや喜びを味わう。
- 小学校での生活が円滑に進むように約束や決まりごとを守ったり、仲間と協力して取り組んだりできるようにする。

アレンジした点・工夫した点

- 近くに畑のない住宅エリアにある園だが、畑と同じような収穫体験が園庭でもできればと考えた。工夫として、バケツよりも大きなつげもの樽を複数使用して、さつまいもの栽培を行い、グループごとに収穫できるようにした。



これまでの経緯

- 幼児が身近な植物への関心を高めるように園庭には季節ごとに花を咲かせ、実がなる木が植えられている。毎年、様々な植物を育てている。自然の変化を感じながら小さな種が成長し、たくさんの花を咲かせることや一つの苗から稲やたくさんの野菜が収穫できる過程の中で自然への愛情や畏敬の念をもつように取り組んできた。



当日及びその後の活動の様子

- さつまいもの絵本の読み聞かせを行い、さつまいも掘りへの関心を高める中で、想像力を刺激したり、聞く力を身につけたりする。
- 園庭に用意された、いも樽の前にグループ（5～6名）ごとに順番に並ぶ。
- 全員が集まり、芋掘りの方法を聞いてから気持ちを合わせて、さつまいもの収穫を始める。
- さつまいものつるを見つけて引っ張り抜く。
- つると一緒に掘り出せない場合は、土を深くまで掘ったり、友達と協力したりして、再度さつまいもを収穫する。
- 収穫したさつまいもの匂いをかいだり、大きさを比べたり、形を見立てたりするなどして友達と伝え合いを楽しむ。
- グループごとに片付けを行い、終わったグループは全体の片付けを手伝う。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 友達と協力して、さつまいもを収穫することを楽しんだ。
（自然との関わり・生命尊重）（協同性）
- 収穫する際のさつまいもや葉、茎、土の感触や匂い、さつまいもの固さや大小や重い軽い・形などの違いを感じた。
（自然との関わり・生命尊重）（豊かな感性と表現）
（数量や図形、標識や文字などへの関心）
- 順番を待ったり、みんなで協力して片付けたりした。（協同性）（道徳性・規範意識の芽生え）



基となる事例を活用しての成果

- 畑が近くにはない園であっても、工夫次第で園内に栽培環境を整えることができ、自然に触れたり、自然の変化を感じ取ったりするなど、植物への関心を高める取組となった。
- さつまいもについて、絵本で紹介してから収穫する活動の流れによって、子供たちはみんなで育てたさつまいもの収穫への関心が一層高まり、さつまいもの大きさや形や感触、土やさつまいもの匂いなどを感じることができた。
- 土の中からさつまいもを見つけたり、友達とさつまいもの大きさや重さを比べたりしながら収穫の喜びや達成感を味わうことができた。
- 自分たちで育て、収穫したさつまいもで作られたご飯、サラダ、味噌汁などの給食を食べることを通して、友達と一緒に食べる喜びを味わったり、調理してくれた方に感謝の気持ちをもったりすることができた。



<基となる事例>

「収穫祭をしよう」

【活用事例】 「脱穀・もみすり体験」 ～田植えから餅つきまで～

事例活用の理由

本園では、毎年米作りの活動を行っている。毎年行っている米作りの活動を、子供たちにとってより豊かな体験にできるようにしたいと考えた。米作り活動の改善を試みたいと考えていたところ、モデルプランにある「収穫祭をしよう」の事例が参考にできると感じ、本事例を活用した。

保育者の願い（ねらい）

- 米作りの過程を体験していく中で、米作りの大変さや収穫の喜びを実感する。
- 米一粒に注目させるため、手作業で米の殻をむく体験を行った後に、粃摺り機や脱穀機の使用を体験することで、生産性の高さといった機械のよさに気付いたり、機械の仕組みに興味をもったりする。
- 園で収穫した米が食べられるまでの過程を知ることで、米の成長過程、食べ物を育てることや収穫への関心、食べ物を大切にすることをもち。

アレンジした点・工夫した点

- 収穫祭までの過程を参考に、今回のねらいが達成できるよう本園の活動一つ一つにどのような意味があるかを振り返り、米作りへの関心が高まるよう計画の見直しを図った。
- 米作りの大変さを実感するために手作業による粃殻をむく体験を重視した。
- 手で粃殻をむく作業と粃摺り機や脱穀機の作業を比較し、機械の便利さをとらえ、ものへの関心を高めるようにした。

これまでの経緯

- 毎年、園内に作った田んぼで、田植えから稲刈りまでを行い、収穫した米で、餅つきをしている。以前の粃摺りは、ペットボトルを使った精米を行っていたが、子供にとって操作の強弱が難しく、米が割れることもあり、米が無駄になってしまうこともあった。そこで、今回は数粒の米を手でむかせることで、作業の大変さを体感し、その後の活動で、粃摺り機や脱穀機のよさに気付くことにつなげた。
- 稲を育てている中で子供の気付き（稲の成長や変化など）を大切にしながら、興味関心をもって見たり、世話をしたりできるようにした。



当日及びその後の活動の様子

- 担任が用意した稲穂から粃を取り、粃殻をむく様子を見せた。
- グループに分かれて、一粒ずつ、手でもみ殻をむく作業を行った。
- 地域の方の協力のもと、用意された脱穀機と粃摺り機で体験活動を行った。
- 唐箕を紹介し、粃の重さによって、段階的に粃を取り除く仕組みを見せた。
- 後日、地域の方に協力いただき、精米した米で餅つきを行った。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 園で収穫した米一粒一粒の様子に関心をもった。（自然とのかかわり・生命尊重）
- お米の殻をむきながら、米の様子について、互いの思いや考えを伝え合った。（思考力の芽生え）（言葉による伝え合い）
- 順番を待つなどのきまりを作ったり、自分たちでつくったきまりを守ったりした。（道徳性・規範意識の芽生え）
- 脱穀機や粃摺り機の使用を体験することで、機械の仕組みに興味をもち、その便利さを感じ取った。（思考力の芽生え）
- 地域の方とのふれあう機会をもつことができ、社会とのつながりを感じ取ることができた。（社会生活との関わり）
- 米を食すまでの過程を体験することで、驚きや感動、喜びや楽しさを十分に体感していた。（自然とのかかわり・生命尊重）

基となる事例を活用しての成果

- 自らの手で米をさわリ、殻をむく作業は、普段食べている米に対して、実はこんな形をしているのかと驚いたり、一粒一粒の形が微妙に違うことなどの気付きが生まれ、興味・関心が高まる中で脱穀・粃摺り体験を行うことができた。
- これまでの米作り体験をより豊かなものとすることができ、例年の活動が深まった。



＜基となる事例＞

「 お店屋さんをしよう 」

【活用事例】

「 秋 」 ～ おみこしごっこをしよう ～

事例活用の理由

- 子供の言葉からつながる保育（プロジェクトアプローチ）を基本とし、子供の自主性を重んじながら、身近なものと対話し、知識を整理する活動や主体的な体験活動を大切にしている。
※プロジェクトアプローチ：子供主体のテーマを基盤とし、対話を通して発展的に展開する。
- 『お店屋さんをしよう』の「目的に向かって、自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いた
りしながら、友達と活動を進めていく。」や「相手にわかるように話をしたり、友達の話をよく
聞いて活動内容を一緒に考えたりして、自分の思いを調整する経験を通して、みんなで活
動をやり遂げた満足感や達成感を味わう。」というねらいの良さを感じ、本園の活動に取り入
れたいと考え、事例を活用した。

保育者の願い（ねらい）

- 「秋」というテーマから地域に伝承行事があることを知る。
- 「おみこしごっこ」の活動を通して、子供同士の対話を大切にしながら、自分の考えや体験
したことを表現することの楽しさや喜びを感じ、自分達の思いを実現していくことで達成感
や満足感を味わう。
- 子供の自主性を重んじ、主体的な活動を通して、表現することの大切さや良さに気づき、自
由な表現ができるようになる。

アレンジした点・工夫した点

- 子供が何に興味をもち、どのようなことをしたいと考えているかを把握した上で、活動が展
開しやすいように、様々な教材や素材、道具を準備し、製作や活動に適した空間そして活動
できる時間を十分に確保して、意図的な環境構成を行った。
- 子供が選択、判断、決定、実行できる場面や環境をつくり、一人一人の子供を丁寧に見取り
ながら、それぞれに適したタイミングで、必要に応じた援助を行うようにした。

これまでの経緯

- 「秋」について、子供達の知っていることやイメージをサークルタイムで確認した。
- 家庭から「秋」と思うものを持ち寄り、みんなに話をした。
- 保育者が地域と連携を図りながら、保育者自身が地域の秋まつりに参加させてもらった。
- 地域の秋祭りに興味をもち、実際におみこしを家族で見学しに行った子供がいたり、当日の
おまつりの様子やおみこしを担いでいる様子のビデオをみんなで見たりした。
- おみこしを絵に描いたり、ブロックや積み木で作成したりした。

当日の活動の様子

- 絵を描いたり、ブロックや積み木で作ったりしているうちに、自分たちがおみこしを担いでみたいという思いが高まった。
- 「おみこしのまわりはこんな色にしたらいいんじゃない」「おみこしの写真ではこんな色だったよ」「じゃあ、屋根の部分は黒色で塗ろうよ」など、子供たち同士で対話をしながら、子供たちが自分の思いを友達と伝え合い、おみこしの形を工夫改善しながら表現し、具現化していく主体的な姿が見られた。
- 保育者や保護者で教材・素材をたくさん用意し、子供自らが素材を選び、主体的におみこしを作れるような環境を整えていた。
- 保育者は、「どうしたらよいと思う？」と子供に投げかけ、子供たちの考えや思いを大事にしながら、活動を見守り、必要に応じて素材の特性を生かせるようなアドバイスをすることで、子供自身で形にしていけるよう援助していた。また子供が創作している場面では、それぞれのアイディアや活動を称賛し、認めることで、満足感や達成感を感じられるようにしていた。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 自分の経験や思いを相手にわかるように話そうとした。（言葉による伝え合い）
- どのようなおみこしを作るか、自分の考えを絵に描いて表現したり、ブロックや積み木で表現したりした。（豊かな感性と表現）
- おみこしを自分たちで作ることで、地域の文化や季節の行事についての興味・関心をもつことができた。（社会生活とのかかわり）
- 子供たち同士の対話から、自由な発想があらわれ、おみこしの形を具現化して、つくりあげることができた。（豊かな感性と表現）
（言葉による伝え合い）
- 友達と一緒に力を合わせておみこしを作る活動を通して、友達とかわる楽しさや達成感、満足感を味わった。（協同性）
- 自分たちで作ったおみこしをみんなで協力して担ぎ、「おまつりごっこ」をすることで、おまつりの楽しさや友達と力を合わせることのよさを味わった。（協同性）



基となる事例を活用しての成果

- 子供自身の「やってみたい」「作ってみたい」という思いや言葉を大事にしながら、活動を進めたことで、より自由な発想や表現を生み出すことができた。
- 子供自身で「おみこし」という形にできたことや、みんなで作った「おみこし」を友達と一緒に担げたことで、達成感や満足感を感じることができた。また、地域の文化に興味・関心が高まり、季節とのかかわりを感じ取ることができた。



<基となる事例>

「みんなでもっとおもしろくしよう -巧技台遊び-」

【活用事例】 「巧技台遊び 自分たちだけのスペシャルコース」
～コースを作ろう！やってみよう！～

事例活用の理由

子供たちは、自分なりの考えをのびのびと伝えることができる。その一方で、伝えたいという思いの強さから、友達や教師の話を聞く場面で話を最後まで聞くことができなかったり、途中で話し始めてしまったりすることがある。

「自分らしさを発揮する子供、人と関わるのが楽しいと思う子供」の姿を目指し、友達と思いや考えを伝え合いながら、巧技台のコース設計図を作り、巧技台遊びをする実践を取り入れた。この遊びをとおして、友達と思いや考えを伝え合いながらコースを作り、完成したコースで遊ぶことの楽しさや達成感を感じられると考え、事例を活用した。

保育者の願い（ねらい）

- 友達と思いや考えを伝え合って巧技台のコース設計図を作り、協力して巧技台の「スペシャルコース」を作って遊ぶことをとおして、友達と一緒に活動することの満足感を味わう。
- 自分の思いを伝えると共に、友達の話に耳を傾け、いろいろな考えがあることのおもしろさを感じる。
- 巧技台の「スペシャルコース」で、自分なりの動きを試したり、友達の動きを真似たり、更に新たな動きを考えたりして、多様な動きを楽しみ、元気な体づくりをする。

アレンジした点・工夫した点

- 自分たちで話し合い、協力して作った巧技台の「スペシャルコース」で十分に遊んだ後、そのコースについて振り返りをする。
 - ・「巧技台磁石」を貼って自分たちの「スペシャルコース」を表現したミニホワイトボードと「『いいね！』磁石」を準備する。
 - ・コースの「楽しかった・ときどきした・難しかった」と感じたところを振り返り、1人ずつミニホワイトボードに「『いいね！』磁石」を貼る。
- 「『いいね！』タイム」を設定し、ミニホワイトボードを使ってグループごとに「スペシャルコース」を紹介し合う。その後、工夫して作ったコースをお互いに体験する時間を設け、その良さを共有できるようにする。



これまでの経緯

- 巧技台を自由に使って遊ぶ中で、階段や一本橋を作るなど、巧技台を使いながら色々なコースを作って遊ぶ体験ができるようにした。
- 「巧技台磁石」とホワイトボードで作成した設計図と同じコースを組み立てる経験ができるようにした。その後、組み立てた巧技台を使って多様な動きを引き出し、その楽しさを味わえるようにした。

当日及びその後の活動の様子

- 各グループで作った巧技台のコース設計図（ミニホワイトボード・「巧技台磁石」）を見せて、これまでの活動の振り返りをする。実際に、どんなコースができるのか、期待を膨らませ、遊びへの思いを高められるようにする。
- 巧技台のコース設計図を基に、グループの友達と協力して「スペシャルコース」を作る。
- 他のグループの友達と使いたい巧技台が重なった際には、お互いに思いや考えを伝え合い、解決できるようにする。教師は必要に応じて思いや考えを伝え合う橋渡しをしたり、整理をしたりして、お互いに理解し合えるように援助をする。
- 完成したグループから巧技台の「スペシャルコース」で遊ぶ。
- 多様な渡り方をしている子供を認め、その動きを紹介し、子供たちの動きのバリエーションが増えるようにする。
- ミニホワイトボードを使ってグループごとにそのコースについて振り返りをする。コースの「楽しかった・ドキドキした・難しかった」と感じたところを振り返り、1人ずつミニホワイトボードに「『いいね！』磁石」を貼る。
- 全グループごとに、「スペシャルコース」を紹介し合う「『いいね！』タイム」を設定する。保育者はその巧技台の場のおもしろさや良さがみんなに伝わるよう、話の補助をする。
- 工夫して作ったコースをお互いに体験する時間を設け、その良さを共有できるようにする。
- グループごとに安全に気を付けながら協力をして片付けをする。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 巧技台のコース設計図を作るために、自分の思いや考えを言葉にして表現したり、友達の話を聞いたりしていた。
(言葉による伝え合い) (協同性)
- いろいろな形をした「巧技台磁石」を使って、自分たちの作りたい巧技台のコースを考え、表現していた。
(言葉による伝え合い) (数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)
- 様々な巧技台を組み合わせた場で、自分なりの渡り方を試してみたり、友達の動きを真似たりしながら、繰り返し巧技台遊びを楽しんでいた。
(健康な心と体) (自立心)
- 自分たちの作ったコースの良さを振り返ったり、友達のコースの良さを感じて楽しんだりした。
(思考力の芽生え) (豊かな感性と表現)
- 友達と協力して巧技台を準備したり、片付けたりした。
(協同性)

基となる事例を活用しての成果

- 「『いいね！』磁石」の活用により、各グループの工夫点や個々の子供の感じたことを可視化しながら、クラス（学級）全体で共有し巧技台遊びを楽しむことができた。
- 後日、4歳児の子供たちの巧技台遊びコース作りをした。その際、子供たちは、どれぐらいの難易度のコースを作ると良いかを自分たちの経験をいかして、話し合うことができた。
- 運動会の障害物走において、本事例のようにコース設計図をマグネットを使って示すと、子供たちは自分たちで準備をすることができた。障害物走を行うだけでなく、自分たちで準備もできたことに、子供たちは満足感を得られたようであった。



＜基となる事例＞

「焼き芋会をしよう」

【活用事例】 「自分達の手で作った電気で
イルミネーションをつけよう」

事例活用の理由

本園では、野菜に関心を持てるよう栽培・収穫する活動の他に、収穫した野菜に金属板を刺し、野菜が電池となる実験を行っている。そこで、『焼き芋会をしよう』の事例の中でも行っていた野菜電池が、保育活動の中で日常的に行われてきたことから、興味関心を発展させるために電池や発電に移行した。身近な自然である、風や水・太陽光が電気に変わる経験から、「手を加えることで生活に必要なものに変化していくことに興味関心を持ち、自分から試そうとする。」という考えを生み出していけるようにしていきたいと考え、事例を活用した。

保育者の願い（ねらい）

- 身近な物や自然に興味をもち、進んで見たり触れたりして発見を楽しめるようになる。
- 身近な素材で自分のイメージを形にして遊びを楽しめるようになる。
- 自分の思いを伝えと共に、友達の考えも取り入れながら、イメージしたものを最後まで作る達成感を味わえるようになる。
- 興味をもったことに関して、自ら意欲的に調べたり考えたりする中で、知識を深めることの喜びを感じられるようになる。

アレンジした点・工夫した点

- 子供一人ひとりの考えや発想を丁寧に受け止め、共感しながら、子供の疑問についてはすぐに答えを教えずに、一緒に調べたり、アドバイスをして見守ったりしながら、自分で気付けた喜びをもてるように援助した。
- 子供たちの意見から出た道具や教材・素材を用意し、子供のイメージを具現化できるように準備し、物的環境を整えた。
- 子供自身が試行錯誤しながら何度も取り組めるよう、十分な活動時間を確保した。
- 成功した時には、子供たちと喜びを共感し、うまくいかなかった時には、それまでの過程を認め、一緒に考え、次への意欲につなげられるようにした。



これまでの経緯

- 野菜や果物が電池になることを知り、実際に繰り返し試していた。
- 電気で光る玩具や音がでる玩具、動く玩具などに興味を示し、日常生活の中にある電気について知りたいという思いが生まれた。
- 風力発電、水力発電、太陽光発電の実験キットを使って電力を作る実験を行った。
- 自分たちの力で発電し、クリスマスツリーのイルミネーションをつけたいと考えた。

当日の活動の様子

- 野菜電池の実験で、豆電球の代わりにメロディーオルゴールを使い、「人参よりも玉葱の方が音が大きく鳴るよ」「縦につなげていくと音が大きくなっていくよ」など、自分で試していく中で新たな発見をしていた。
- 豆電球、LED ライト、プロペラ、光電池、太陽光パネル、乾電池、自動車、スイッチ、モーターなどの教材・素材がたくさん用意され、子供たちがいろいろな物に興味・関心をもてるよう物的環境が整えられていた。
- 手回し発電機を使って電気を起こして電球を光らせたり、うちわを仰いで作った風をあててプロペラを回して電球を光らせたりして遊んでいた。
- 豆電球や乾電池、スイッチを使って回路を自分自身で作り、「どうしたら電気がつくかなあ」と試行錯誤しながら、遊びを通して夢中になって取り組んでいた。
- 太陽光パネルのついた自動車で遊んでいた子供は、「おひさまの光があたると車が走るよ」「おひさまの方に向けた方がいいよ」と友達同士で教え合っていた。
- 自分たちの力で作った電気でクリスマスツリーのイルミネーションを点灯させたいという子供たちの思いを受け、園で開発した自転車発電機を使い、子供たち自身が一生懸命にペダルをこぎ、イルミネーションを光らせることができた。見ている子供たちからも大きな歓声があふれた。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- 一つのことを最後までやり遂げる力が身に付いた。 (自立心)
- 友達とアイデアを共有し、一緒に楽しみながら、発電することのおもしろさを味わった。 (協同性)
- 一つの物事に協力して、やり遂げる楽しさや達成感を味わった。 (協同性)
- 発見する楽しさ、面白さ、自らが学ぼうとする気持ちを育んでいた。 (思考力の芽生え)
- 物事を予想したり、展開したり、考えを巡らせ、新しいものにチャレンジしていた。 (思考力の芽生え) (豊かな感性と表現)
- 「プロペラにうちわで風をあてて回すと電気がつくよ」と、子供達が活動の中での気づきを言葉にして、他者に伝える姿が見られた。 (思考力の芽生え) (言葉による伝え合い)

基となる事例を活用しての成果

- 興味・関心をもったことに進んで取り組み、意欲的な活動、達成する経験を繰り返すことで、できるまで諦めない力や創意工夫する力が育まれた。
- クラスで同じ目的に向かって活動することで、「協調性」「言葉による伝え合い」が深まり、人間関係の基礎を培うことができた。
- 自分の思いを伝え合ったり、相手の気持ちを考えたりして、みんなで意見を出し合い、一緒に考えて解決していく中で「社会性」が育まれた。
- 遊びを通して、学びを深めることの楽しさを知り、小学校での学習意欲につながっていきます。



＜基となる事例＞

「幼保小の円滑な接続に向けての取組」

【活用事例】 「幼小合同研修会」

事例活用の理由

「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」（2022年、文科省）の中で、「半数以上の園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない」等、幼保小連携の課題があげられている。ここであげられている課題は、当園と近隣小学校との間においても直面している課題であると感じられた。

子供たちの資質・能力の育成のために、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が求められる。そのために、従来行ってきた園児と児童との交流だけではなく、園児・児童の実態、教育内容や指導方法について相互理解を深める機会を設けることが学びの連続性を考える上で欠かすことができないと考え、県内の市町村が行った幼保小の円滑な接続に向けた合同研修会の事例を活用した。

研修主催者の願い（ねらい）

- 幼児教育担当は、幼児教育が小学校教育の教科教育にどのようにつながり、生かされているのかを理解する。
- 小学校教員は、幼児教育ではどのような活動（遊び）が行われ、そこでどのような育ちが見られるのかを理解する。
- 園と近隣小学校それぞれが互いの教育内容や指導方法について相互理解を深め、幼児教育と小学校教育が円滑に接続され、子供たちの資質・能力がよりよく育まれることを目指す。

アレンジした点・工夫した点

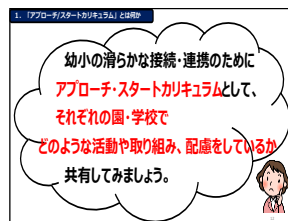
- 幼小合同研修会における学びや幼児教育担当者と小学校教員との関わりが、これからの幼小の円滑な接続に実際に生かせるよう、研修参加者は園職員と、近隣小学校の管理職と低学年教員とした。
- 千葉県総合教育センターにおける「幼児教育アドバイザー派遣」を活用して、2名の講師（幼児教育アドバイザー・小学校籍研究指導主事）を招聘した。
- 講話のテーマを「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」として、2名の立場の異なる講師（幼児教育アドバイザー・小学校籍研究指導主事）から、幼児や児童の育ちと学びのつながりの大切さが理解できる講話をしてもらえるよう依頼した。

これまでの経緯

- 園でバスをチャーターして年長児が学区の小学校に出向き、小学1年生との交流の場を設定した（「1年生に学校を案内してもらおう」「お店屋さんごっこ（生活科）への参加」など）。
- 地域への園児の作品展や保育公開の機会を設け、そこに小学校の先生方も招待した。

当日の様子

- 研修参加者は14名（幼児教育担当：8名・小学校教育担当：6名）
- 「幼児教育」について、幼児教育アドバイザーの講話から幼児教育の教育内容や指導方法、そして幼小連携の「キーワード」である遊びを通した総合的な指導から捉える「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の10の姿について学んだ。
- 「幼児教育と小学校教育のつながり」について、小学校籍研究指導主事を講師に、「幼児教育と小学校教育の違い」「アプローチカリキュラムとスタートカリキュラム」「幼児教育における遊びと生活科学学習」について学んだ。小学校の教科学習の基盤に、幼児期における豊かな遊びや経験が重要であること等について理解を深めた。
- 講師の講話を踏まえて、園と小学校それぞれが行っている取組（アプローチ・スタートカリキュラム、夏の遊び・生活科学学習内容等）について情報交換をする。
- 園の「夏祭り」に向けた活動内容や取り組みの様子と、子供たちの育ちの様子について発表をして、小学校教員に当園における教育について理解を図った。
- 小グループで、園と小学校とで情報交換を行った。



基となる事例を活用しての成果

- 幼小合同研修会後にアンケートを実施した。
 - ・「研修は満足のいくものでしたか。」の質問について、図1のような回答結果であった。研修は受講者全員にとって概ね「満足のいく」ものであったことが分かる。
 - ・「研修はこれからに生かせるものでしたか。」の質問については、図2のような回答結果が得られた。受講者全員にとって、研修がこれからの教育に生かせるものであったと感じられるものであったことがうかがえる。

○研修後の、研修受講者の感想は下記のとおりである。

〈幼児教育担当〉

- ・「今、やっている保育が小学校でも活かされていたり、似たような活動があったりすることが分かりました。今後も自信を持って継続したいと思いました。」
- ・「小学校の教育課程についても少し知ることができたので、今後見通しを持ちながら、幼稚園教育を進めていきたいと思います。」

〈小学校教育担当〉

- ・「『幼児期の終わりまでに育って欲しい姿』の視点をもって小学校の学習過程でも意識しながら進めていきたいと思いました。」
- ・「幼稚園の先生と交流や情報交換ができて良かったです。幼稚園や小学校のことを、お互いに知ること、目の前の子供たちにできることが増えていくように感じました。」

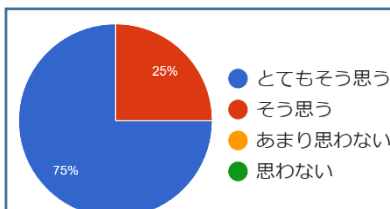


図1. アンケート結果（研修は満足か）

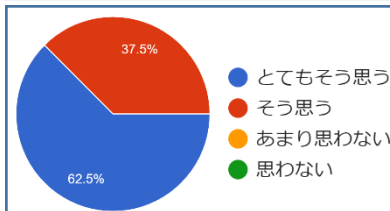


図2. アンケート結果（研修は生かせるか）

